最優秀賞

静の内にある力強さ

能美市立根上中学校　２年　小酒　夏穂

「クラスィーバ」（きれいだね）、ホストファミリーの皆さんは拍手をしながら喜んでくれました。

７月末より約１０日間、私は能美市シェレホフ市少年親善使節団としてロシアに行ってきました。私は、ホストファミリーの前で日本舞踊「荒城の月」を踊りました。じっと私を見つめ、踊り終わると「スパスィーバ」（ありがとう）「オーチンハラショ」（すばらしい）と私がわかるロシア語で感想を述べてくれました。また浴衣について興味を持ったようで、一緒に何枚も写真を撮りました。ホストファミリーの皆さんも日本の着物については知っていましたが、着物を着て踊る場面は初めて見たそうで、「舞妓はん」と言って喜んでくれたことに驚きました。ロシア語は難しく、英語もほとんど通じないため、詳しく説明をしたり、感想を聞いたりすることはできませんでした。しかし、皆さんが想像以上にとても喜んでくれ、日本文化を少しでも知ってもらうきっかけになってよかったと思いました。それまでロシア語が通じず不安な気持ちでしたが、これを機にずっと前から知っている友達のようにホストファミリーの皆さんとの一日を楽しく過ごすことができました。

私は４歳から日本舞踊を習い始めました。小さい頃は、正座や長い稽古に耐えられず泣き出してしまうこともありました。しかし、難しい振りを習得できた時の喜びや、長い曲を踊り終えた時の達成感を味わうことができ、今では続けてきて本当に良かったと思っています。

日本舞踊は、日本古来の着物や、邦楽を使用することで、日本語が通じなくても日本文化について感じてもらうことができることから、今回の国際交流でもとても役立ちました。そこで、その日本文化の素晴らしさを知るため、日本舞踊の先生に、大切にすべきことを尋ねたところ、先生はこのようにおっしゃいました。日本舞踊に限らず習い事は修行の一つであり、正しい姿や基本を身に付けることによって、一つのことをやり遂げる強い気持ちが養われる。そして、心も豊かになり、礼儀正しく、道筋を立てて人生を歩める人になる。また、芸の道を習得するためには厳しさもあるが、それを乗り越えることによって、人をやさしく包み、相手を思いやる心が持てるようになる、と。その時、私は気づきました。その心こそ、日本人が古くから大切に守り温めてきた日本の心そのものだと。

あの三月の東日本大震災の際には、互いに助け合う気持ちを忘れず、辛抱強く支えあう日本人の姿が、外国から高く評価されていることを知りました。日本人は恥ずかしがり屋で消極的、感情を巧みに表現することも苦手で、それをマイナスと見る傾向があります。しかし、それを日本人特有の物静かで慎み深い「静」の部分と見ると、この「静」には、「動」に勝るとも劣らない強いエネルギーが秘められていることに気付かされます。なぜなら、この「静」は、周囲の状況をしっかりと見つめ、判断し、自己の弱さにも打ち勝ち、たくましく未来を切り開いていこうという力強さを内に秘めているからです。このように考えると、日本人のこの「静」の部分は、決してマイナスではなく、プラスと自信を持って捉えるべきなのではないでしょうか。

私は、今回のロシアでの交流を通し、世界の多くの人々に日本文化を通じて日本の良さを知ってもらいたいと思うようになりました。また、逆に世界の文化に触れることによって外国の良さもどんどん吸収したいと思うようにもなりました。そのためには、人と人との繋がりを大切にし、互いの声に耳を傾け、広い視野を持って、自分自身を高めていきたいと思います。日本文化の「静」の内にある力強さに誇りを持ち、大切に大切に温めながら…。

優秀賞

窓ガラス一枚の向こうには

金沢市立野田中学校　３年　遊佐　夏姫

「バンバン！（窓ガラスをたたく音）」
この音を聞く度、思い出すことがあります。それは去年の夏のことでした。
私は中学二年生の夏休みに、母と妹と三人で、フィリピンのセブ島へ十日間語学留学に行きました。その間私たちは、寮から語学学校までスクールバスで通っていたのですが、そんな、学校へ入って二日目の朝のことです。信号でバスが止まると突然「バンバン」と窓を叩くような音がしました。驚いて窓の方を見ると、六、七歳の二人の女の子が必死に窓をたたいていたのです。体は驚くほどガリガリで、手には薄汚れた果物がにぎられていました。そして彼女たちのビー玉のような瞳は私たちに、
「買って下さい！買って下さい！」
と訴えかけているようでした。周りをみてみると、たくさんの子供が果物や飲み物を売ろうとしていて、道の端には、子供たちの親が腕を組んで立っていました。私は思わず日本人スタッフに、「おこづかいで果物を買っても良いですか。」と尋ねました。しかし彼は、
「だめです。」
と言ったのです。
「どうしてですか。」
すかさず聞き返すと、彼はこう言いました。
「今窓を開けたら、他の子ども達もこのバスに寄ってきて、自分のを買ってほしいと訴えるでしょう。そうしたら、バスは動けなくなってしまいます。」
私は悔しくて悲しくて胸がいっぱいになりました。涙が止まりませんでした。
その後、こんな事も言われました。
「あの時窓を開けていたらみんなが寄ってきていたでしょう。でもあなたは、その子たち全員のを買えますか？それだけではありません。二人の子から果物を買ったとして、あの子たちは本当に幸せになるでしょうか？きっとあの子たちの親は明日もまた、果物を持たせて売ってくるようにと、路上に立たせることでしょう。」
私は力が抜けていくのを感じました。私が軽率な気持ちで果物を買っても、子供たちを助けることにはなりません。むしろ、自己満足にしかならなかったでしょう。それでも、あの時一個だけでも買いたかったです。何もせずに、子供たちから目をそらして立ち退いてしまった自分を悔やみました。
日本に帰ってからも、子供たちの瞳が頭から離れませんでした。私たちが当たり前のようにしていること、例えばお腹いっぱい食べること、学校へ行ってたくさん学ぶこと、それらを夢に見ているような瞳でした。
私は今まで、世界にはそんな子供たちがたくさんいることを知りませんでした、というと嘘になります。知っていたけれど、よく考えたことがありませんでした。自分とは無縁の、かけ離れた存在だと思っていたからです。でも、窓ガラス一枚向こうには、そんな子供たちがたくさんいたのです。
最近テレビでも、学校へ行くことのできない子供たちを、支援していく話が特集されています。本でも、現地まで足を運んでその国の子供たちの声を綴ったものが売られています。私たちが生活していく中で、このような事を知る機会はいくらでもあると思います。そんな時、少し立ち止まってみて下さい。私のように、きっと何かを感じるはずです。自分になら何が出来るのか考えてみて下さい。どんな小さなことでも、「やろう」と思うことが大事だと思います。確かに中学生の私達に、大きな変化をつくることまでは出来ないかもしれませんが、「やろう」という強い思いを持ち続けていれば、大人になってから、きっとその思いをはたすことが出来ると思うのです。母がこのようなことを言いました。
「あなたがあの時、果物を一個でも買いたかったという気持ちを大人になっても忘れないでほしいわ。」

私は決して忘れません。そして将来、あの時の思いを胸に、みなさんの「やろう」という気持ちを届けるような仕事をしていきたいです。一人でも多くの子供が幸せになれるように・・・。

優秀賞

小さくても

加賀市立山中中学校　３年　鹿野　ひろ子

私の身長は一一九センチメートル。低身長です。背骨が曲がっており、背中が少し出っ張っています。側わん症と骨幹端異形成症という病気です。とても軽い病気なので、生活に不自由を感じたことはありません。毎日、みなさんと同じように学校へ行き、とても楽しい生活をしています。ただ、友達と話すときに友達の顔を見上げなければいけないというのが、少し大変なところです。また、みなさんと同じ速さで走ることや長い距離を歩くことはできません。しかし、他はみなさんと同じです。

小さいため、すぐに人に名前を覚えてもらえたり、みなさんとは違う風景を見ることができたり、良い事はたくさんあります。しかし、嫌な思いをすることもあります。

私が、制服で外へ出ると、たまにジロジロ人に見られていることがあります。また、

「あの子、小さくない？」

と同じ歳くらいの女の子二人がヒソヒソ話しているのを聞いたこともありました。それは小さいのに、中学生なのだということと、背骨が出っ張っているのが不思議だという理由からだと思います。他の人からジロジロと好奇な目で見られるのは、決して気分の良いものではありません。ジロジロと見られる人の気持ちも、考えてください。それに、私のことを話していた本人達は、言ったことをすぐに忘れてしまっていると思いますが、私はショックで、なかなか忘れられません。そのような何げない言葉や行動でも、きちんと相手のことを考えてほしいのです。

みなさんより小さいことは「変なこと」でしょうか。私は決して「変だ」とは思いません。この体は私の特徴であり、個性です。みなさんが一人一人特徴があり、違っていることと同じだと私は思っています。だから、私のように体に特徴をもっている人のことを「変だ」とは思わないでほしいのです。私は、この体で生まれて嫌だと思ったことはありません。むしろ、感謝しています。だから勝手に「変だ」と決めつけないでください。

私には、みなさんと同じように、夢があります。それは薬剤師になることです。小さくても他の人と同じように人の役にたつ仕事をやりたいのです。私は、たくさんの人に助けてもらいながら生きているので、その人達やもっと多くの人を、助けたいと思います。今までの分を倍にして、恩返しをしたいのです。また、社会にでて仕事をすることにより、私と同じように体に特徴をもった人を励ましたいと思っています。

そして、私をしっかりと受け入れてほしいと思います。病気をもっているから、という理由で夢をあきらめたくないのです。普通の人とは違う体でも、何もできないわけではないからです。例えば、私は吹奏楽部に所属していて、フルートを吹いていました。他にも、みなさんと同じように勉強したり、できることはたくさんあります。けれど、助けてもらわなければ生活は大変です。だから、みんなで助けあっていくことが大切だと思います。

私は、高くて手が届かない所の物を友達に取ってもらうことが、よくあります。友達は何も言わなくても気遣って、歩く速さを合わせてくれたり、さりげなく支えてくれます。それで、いつも感謝しています。その無言の気遣いが、とてもうれしいのです。この社会に、私の友達のような、自然な気遣いをできる人が、もっと増えれば、みんなが生活しやすくなると思います。

だれでも、それぞれの違いを理解し、認めあえば、みんなが楽しい生活ができ、夢に向かってがんばることができると思います。その社会への一歩は、みんなが、それぞれ自分のできることを行い、人の

ことを思いやり、助け合うことだと思います。

奨励賞

自分から変われる人に

七尾市立七尾東部中学校　３年　嶋田　有莉

その日は、私が所属している吹奏楽部の合奏のレッスン日でした。音楽室のどことなく気の抜けた空気は先生がいらしても変わらず、課題曲のマーチは、本来の爽やかなイメージとはかけ離れた、重くやる気のない吹き方になってしまいました。目標の「ゴールド金賞・県代表」にはほど遠い演奏。前に座る部員のゆるんだ表情を見ていると、私のやる気が吸い取られていくような気がしてなりません。こんな無気力なメンバーばかり集まったからいつも銅賞なんだよ。そう思っていると、突然私に先生の声が飛んできました。

「嶋田、今日なんかテンション低くないか。トランペットのファーストがテンション低いと、みんながテンション下がるんだよねー。その席は自分でテンションをコントロールできる人が座る場所なんだよ。バンド全体のテンションがそれで決まるんだから。」

私はまさか自分が怒られるとは思っていなかったので、しばらく呆然としてしまいました。なんで私だけが怒られなくちゃいけないの。大体私が入ってくる前からこの空気だったのに。私がみんなのテンションを下げたんじゃなくて、みんなに私のテンションを下げられたんだけど。憤りからか、自然と私の目から涙があふれて止まらなくなりました。

部活動が終わり、家に帰った私は着替えることもせず、カバンを放り投げてベッドに寝ころんでいました。その時、何気なく手元にあった本を広げて読んでいると、ある言葉が私の目に止まります。「見たいと思う世界の変化にあなた自身がなりなさい。」それはインドの偉人、マハトマ・ガンジーが残した言葉でした。私自身が変わる・・・。合奏での私、教室での私、家での私。日常のあらゆる場面の私が、ありありと目に浮かんできました。そのどれもが、みんなに変わってほしいと思いながらただ待っていただけで、自分からは変わろうとしない私だったのです。「お前は卑怯だ！」ガンジーからそう見すかされたような気がして、私の体に衝撃が走りました。

自分から変われる人になろう。簡単なことではないれど、まず自分が動いてみよう。

そう決心した時、私はパート練習の内容を充実させることを始めることにしました。これまではパート練習という名の個人練習でしかなく、私自身も自分を甘やかし、下級生の指導ができていませんでした。しかし変わろうと決めてからは教本で研究し、内容を濃くして、本当のパート練習をするようにしました。

すると、トランペットの音が徐々によくなってきたのです。講師の先生が来るたびに、「トランペットのうまさにはびっくりした。」「東部のトランペットが断とつうまかった。」と言ってもらえるようになりました。パートの雰囲気が明るくなり、後輩と何でも話せる親しい間柄になることもできたのです。自分から変わることで周囲がこんなに変わるのだ、ということを初めて実感しました。

このことは部活動だけではありません。どんな場面にも通じることだと思います。自分が変わることで、まだまだ変えていけることがあるはずです。私はこれからも家庭や学校生活で、自分から変わるということを実践していきます。

奨励賞

努力

七尾市立朝日中学校　３年　當山　萌香

最近私は「努力」という言葉の意味について考えることがあります。先生や親の話でよく耳にするこの言葉は、本当はどういう意味なのでしょうか。私がこのようなことを考えるようになったのは、母との何気ない会話がきっかけでした。

テスト勉強に疲れていたある日、私はふと

「勉強しないで、いい点、取れないかなぁ。」とつぶやきました。すると母に、

「努力せずに何かを得ようとしてはいけないよ。」

と言われたのです。私はそのとき、「努力」とは何だろう、と考えました。

まず私が「努力」と聞いて、真っ先に思い浮かぶのが英語です。なぜなら、幼いころにアメリカに引っ越した私にとって最も大変だったのは、英語を身につけることだったからです。今では友達がたくさんでき、学校生活も毎日充実していますが、当時の私は、誰とも会話ができず、学校では毎日一人ぼっちでした。しかし、どうにかして友達を作りたいという思いから、家庭教師に教わったり、休み時間を削ったりして、英語を勉強しました。そのかいがあって、引っ越してから一年後には、誰とでも英語で話せるようになり、友達もたくさんできました。現在、英語のテストなどで良い点を取ると、友達から

「いいなあ。羨ましい。」

と言われることがありますが、良い点を取ることは決して簡単ではありません。八年前のあの努力があったからこそ、今の自分がいると思います。

また、私の母も尊敬できる努力家です。母は現在、看護師の仕事をしていますが、こうして仕事をしているのも、母の努力の成果だと感じます。看護師になるためには、看護の専門学校を卒業した上で、国家試験に合格しなければなりません。看護学校は実習、授業が厳しく、辞めていく人がいたり、国家試験は毎年不合格者が出たり、容易な道ではありません。そんな中、母は家事や子育てをしながら、寝る間を惜しんで勉強し、見事合格したのです。一日に三時間しか寝ない日や、勉強をしすぎて体調を崩した日もありました。それでも決してあきらめず、全力を尽くした母の努力は、今こうして報われています。私は母のそんな姿から、努力の大切さを学びました。

「努力しても結果がついてこないときはある。けれども成功の裏には必ず努力がある。」これは卓球部のコーチがおっしゃっていた言葉です。この言葉は、私の好きな言葉の一つで、いつも私を励ましてくれます。確かに私の経験からも、努力は必ず良い結果に結びつくわけではないと思います。北信越大会を目指し、部員全員で一致団結して頑張ってきた部活では、北信越まであと一勝というところで惜しくも負けてしまいました。しかし部活を引退した今、今度は「獣医になりたい」という自分の夢に近づくために、努力を始めています。勉強はもちろん、スポーツ、地域活動も自分の幅や経験を広げるために一生懸命行っています。そして例え失敗しても、結果がついてこなくても、あきらめず、努力し続けたいです。

友達を作りたい一心で、必死に英語を勉強した小学生のころから大きく成長した今、私は夢に向かって努力する決意を新たにしています。今の努力が、いつか夢に通じると信じて。

奨励賞

家族との会話から

能美市立辰口中学校　３年　村西　優画

みなさん、最近家族ときちんと会話をしていますか？小学校の頃とは違って中学生になってからは、勉強や部活動の忙しさに追われて時間の余裕がなかなかなく、ゆっくりとは会話できないのではないでしょうか。もちろん中には、たくさん会話をしている人もいるかもしれません。しかし、僕自身としては家族との会話があまりなくなってきていると思います。それに気が付いたのは、毎日のように言う母の口ぐせからでした。

「おかえり。今日どうだった？」

母は僕が帰ると必ずといっていいほど聞いてきます。僕はそれに答えることがついつい面倒になり、「別に」とか「なんにもなかったけど」と簡単な言葉で済ますようになりました。そうして母親とあまり話さなくなっていたのです。ところがある日、母が、

「今日あったことぐらい何で話すことができないの！」

と、急に怒り出しました。僕はこの時、なぜ母が怒り出したのかがよくわかりませんでした。

そもそも会話とは何か。辞書で引いてみたところ、「二人または数人で共通した話を進める」という意味でした。会話という行為には必ず相手が存在します。だから、会話をするときには相手の言葉をしっかり受け止めて、それに対して真剣に受け答えするという相手への思いやりがないとうまく成り立たないのです。お互いに言葉のキャッチボールをすることで人に対する優しさが育まれていくのだと思います。そのため、僕自身の粗末な対応や、家族との会話がなくなってきているということは、その家族に対する思いやりが欠けてきていたからなんだと思いました。僕はこの時、初めて、母が怒った意味に気が付きました。

毎日のように母が問いかけてくることは確かに面倒でした。しかし、それは母の思いやりであり、そんな母の問いかけに対して、粗末に返事をしていた僕の態度に母はとても怒ったのだと思います。だから僕は、自分の適当な応対を反省し、そして今度は母からではなく自分から家族に対して話しかけてみることにしました。すると、一問一答のさみしいやりとりではなく、会話の内容が膨らんでいきました。話す機会も増え、きちんとした「会話」ができるようになったのです。こんな些細な会話のやりとりが、家族とのつながりを深くするのだと気付かされました。

これは決して、家族の場合にだけ言えることではありません。友達や先生、地域の方々、相手がどんな人であっても、人とのつながりには「会話」が欠かせません。自分から話しかけることは、なかなか普段では難しいことだと思います。それでも勇気をもって自発的に会話をすることで、人とのつながりの道が開けると思います。だから僕は、たくさん会話をしていろんな人とつながっていきたいと思います。そうして、自分の世界をどんどん広げて、いろんな人の気持ちを分かち合える優しい人間になりたいと思います。

奨励賞

人をつなぐかけ橋

石川県立金沢錦丘中学校　３年　長田　花純

みなさん、英語は好きですか？英語は世界の共通語であり、英語を使えば世界の人々と交流することができます。ちがう国の人々と思いが通じ合うととてもうれしいし、知識が増えて心も豊かになります。私はそんな英語が好きです。

しかし、最初から大好きだったわけではありません。英語が苦手だ、という人もいると思いますが、実は私も以前はその一人でした。

私は小学生のとき、英語の授業があまり好きではありませんでした。みんなの前で英語を話したり、読んだりするのがはずかしかったからです。

私には家が近くて週四回の習いごとも一緒だった友達がいます。その子は小さいときから英語を習っていて単語をたくさん知っていたので、時々私にクイズを出してくれました。でも、私は単語の意味も読み方も全然分からなかったので、いつも答えることができませんでした。遊び半分でやっていたクイズでしたが、私は答えられなくてちょっと悔しく思いました。なぜなら、その子は一番の友達でもあり、ライバルでもあったからです。

中学校に入学して、私は友達に追いつこうと英語を一生懸命勉強しました。単語、熟語、文法。覚えることがたくさんあって思っていたより大変です。また、会話の多い授業も苦手でした。テストもなかなか上手くいきません。私のやる気はしゅるしゅるっとしぼんでしまいました。

英語に対してマイナスの感情を持ったまま迎えた中二の夏休み。

その夏、私は金沢市中学生親善団として中国へ渡り、ホームステイを体験することになりました。

私はこのホームステイが心配でしかたありませんでした。ホームステイ先の子は外国語学校に通っているので英語がペラペラ。「思っていることがちゃんと伝わらなかったらどうしよう・・・。」そんな不安を抱えたまま私のホームステイは始まりました。ホスト家庭に到着すると、ホストファミリーの女の子は緊張でがちがちだった私をいろいろと気づかってくれました。難しい英語もあって分からないこともあったけれど、私が分かるように工夫して話してくれたのです。私も知っている英語や身ぶりを使って一生懸命答えようとしました。私の言葉を聞いて彼女から笑顔がこぼれると、「伝わったんだ！良かった！」と感じることができました。私も自然と笑顔になり、本当にうれしかったです。こうして心が通じ合ったと思えることが増えていったのです。

中国から帰ってきて、私は「思いを伝えられるってすごいことだ！」と感じ、英語を実際に使うことを意識して勉強するようになりました。もっとたくさんの人と話してみたい。そう思った私は、今年ロシアへ渡りました。英語が少し好きになっていた私は、去年よりも自分から話しかけるようになり、ホストファミリーと学校のこと、震災のこと、文化の違いなどについて話し、絆を深めることができたのです。

もし英語がなかったら・・・。私は絆を深めることができたでしょうか。会話をすることができたでしょうか。きっとできなかったと思います。たとえ、あいさつ程度の中国語やロシア語が話せても、その後の会話を続けることはできないし、ジェスチャーで伝えようとしても限界があります。ホームステイを通して学んだこと、それは英語が「言葉」であるということです。以前の私は友達に追いつこうと、英語を「教科」として扱っていました。でも英語を学ぶ上で一番大切なことは「伝える」ことなのだと気づくことができました。文の形だけ覚えても、そこに思いを伝えようとする意思がこめられなければ「言葉」としては成立しないのだと思います。伝え合うために言葉はあるのです。

今、私はたくさんの人と思いを伝え合うための「言葉」として英語を勉強しています。そしてもっと知識を増やした上でまた外国の方と話してみたいし、大人になっても外国の方と交流する活動に積極的に参加していきたいと思っています。

みなさんも英語を「言葉」としてつぶやいてみませんか。ワークや教科書を飛び出して英語を話してみませんか。きっと英語に対する見方が変わってくるでしょう。

英語、それは人と人とをつなぐかけ橋なのです。

奨励賞

今　ある命を大切にして

津幡町立津幡南中学校　２年　田辺　未奈

私は、日頃新聞を読んでいて自ら命をたつ自殺や相手の命をむやみに奪う殺人は、おかしいと思いました。

世の中には自分がどんなに苦しい状況にいても相手を思い「頑張れ」と声をかけ、精一杯自分の人生を生きた人。生きたくても生きられない人がいるのに、自殺をしたり殺人をしたりする人がいるのは、なぜでしょう。

以前、私は「いのちの作文ー難病少女からのメッセージ」という本を読みました。この本は骨のガンで大腿骨骨肉腫という難病におかされながらも、十三年という年月を一生懸命生きた女の子瞳さんの話です。瞳さんはあと半年の命と言われても、その半年を精一杯生き抜き周りの人のために絵を描いて励ましたり、声をかけて元気づけたりと自分が出来る事をいつも考え実行しました。また

「自分のせいで瞳は苦しんでいる。」

と、自分を責め続ける母に

「私が、ガンでよかった。ほんとママがガンじゃなくてよかった。ママがガンだったら私辛くて生きていけなくなってしまう。」

という瞳さん。どんな状況でも相手を思う、本当の優しさってすごいと思い、涙があふれ止まりませんでした。この本から、私の分までみんな楽しく生きてほしいという、瞳さんの思いが伝わってきました。せっかく生まれたのに死の道を選ぶのは、今生きている喜びと命の大切さを知らないからだと私は思いました。そして多くの人が瞳さんのような子を知れば命を大切にしなければいけないと考えるのではないでしょうか。

私がこんなに命を大切にしないといけないと思うのは自分の体験が関係しています。

私は幼い時、良き理解者であった祖父を亡くしました。祖父は病気でも最後の最後まで自分で出来る事はして、いつも笑顔でした。

命の終わりはいつくるか分からない。だからこそ一日一日を大切に生きていかなければいけない。祖父がそう教えてくれたような気がします。

そして昨年、私が自分の命の大切さを改めて知る事になった出来事がありました。それは、みんなで運動会の練習をした時のことです。私は走っている途中で、コーンに足をとられ倒れてしまい、頭を強く打ってしまいました。その後の事はあまり、覚えていません。救急車で病院に運ばれ、母が心配そうに私を見つめ、ずっとそばにつきそってくれました。入院中は祖母やおばが遠くから心配してかけつけてくれました。弟は私の体を気づかってくれました。私の事を心配してくれたのは家族だけではありません。退院して、学校に行くと迷惑をかけたはずなのに、みんなが「大丈夫、心配したよ！」と声をかけてくれました。その時、私は一人じゃない、私の命は私だけのものじゃない、そう思いました。今ある命を大切にするというのは周りの人のためにも一生懸命に生きる事だとこの出来事を通して思いました。

また、三月十一日の東日本大震災では一瞬で多くの人の命が奪われました。本当に現実でおきているとは思えない光景に私はただ、呆然とするだけでした。でも、この光景を見て私はこう思いました。今こういう風に生きている事、それだけで幸せなのだと。だから私はこの命を大切にしようと思います。自分のためにも私を支えてくれる人達のためにも。だから皆さんに絶対、殺人や自殺のような今ある命を粗末にする事だけは、しないでほしいし少しでもそういう人が減るといいなぁと思います。

私はこれからも、色んな事でつまづき悩む事があると思うけれど、一つ一つをしっかりと受けとめて、くじけず生きていきたいと思います。

奨励賞

平和を造る

金沢市立額中学校　３年　楠　彩

私達は、日々当たり前の習慣として行っている事がたくさんあります。例えば、学校に行って勉強する事、お腹一杯ご飯を食べる事などですが、このような事は当たり前にできると言って良いのでしょうか。普段何気なく行っている事、それは私達の周りが平和な空間だからできるのではないのでしょうか。

今、私達の周りには平和な空間を失いつつある人もいるのです。

三月十一日、東日本大震災が起こりました。テレビに映る、段ボールで仕切られた避難所や、そこで寒さと恐怖で身を震わせる被災者の姿。そして津波にのみ込まれていく町並みの映像には、今までに感じた事のない衝撃を受けました。一万六千人の人が亡くなり、今だ四千人以上の人が冷たい海の底や、がれきの下で行方不明のままになっています。この震災を機に、戦争だけが平和を奪うのではない事に気付きました。いつ起こるか分からない自然災害。戦争と同じように、たくさんの人々の命と平和が一瞬にしてなくなるのです。

―もし私が被害に会って、今の生活ができなくなったら―

そんなことを考えると心が痛くなります。被災された方々はもっと辛くて苦しい思いをしているのに、私は普段と変わらない生活が送れる事、そして何もできない事がすごく悔しいです。

―今、平和な空間にいる私がどうしてこんな気持ちになるんだろう。―

こう思っている時、ある事を思い出しました。

私の曾祖母と祖父は戦争を体験しました。曾祖母はよく戦争の話をしてくれます。たくさんの資料を見せ、涙を浮かべながら私に一生懸命に語ってくれます。資料の中には、手紙や軍隊手帳、そして私の亡き曾祖父の写真がありました。初めてその写真を目にした時、全身に鳥肌がたったのを覚えています。戦時中に義父を栄養失調、一人の子供は早産で亡くしたにもかかわらず、曾祖母は決してめげる事なく、働きながら二人の子供を育てました。家族思いの曾祖父は太平洋戦争に召集され、お国のために戦いましたが、終戦の三か月前にフィリピンのミンダナオ島ダバオで戦死しました。戦後、曾祖母はたくさんの人の支えがあって前向きに生きてこられたそうです。

私は、この話を曾祖母から聞けた事をすごく誇りに思います。今の時代に生きている事がどんなに幸せな事かを身に染みて感じました。普段と変わらない生活が送れる事を、申し訳なく思う考え方を変え、前向きに生きる事が大切だと思うようになりました。

今、日本が失った平和を取り戻すためには、人と人のつながり、地域と地域のつながり、国際社会の国と国のつながりが大切だと思います。そのつながりの一つにコミュニケーションがあります。コミュニケーションは、平和な空間を造るきっかけであり、第一歩です。また、コミュニケーションは個人個人にとどまらず、国と国のコミュニケーションも大切だと思います。他国と交流のない国々の間では、今も紛争が絶えません。争いを起こさないため、そして平和な空間を維持し、より良いものにするためにも、平和な時の国際間の交流が必要です。

平和な空間は、いつ完成するかのかも、どのようになくなるのかも分かりません。身の周りに何が起こるのかも知る事ができません。しかし、どんなに不安でも、何もかもが無茶苦茶になったとしても、人と人のつながりと気力があれば、何度でもやり直せるのです。

人と人の関わりが少なくなっていく現代社会で、今回の震災や、曾祖母の戦争体験は平和な空間を造るために何が大切なのかを教えてくれました。

現実を知って理解をする。そして、一人の人間として未来の平和造りに向き合っていく事が、私達に与えられた一つの試練だと思います。

奨励賞

まわりの目

白山市立鶴来中学校　３年　五十川　幸子

私は今、毎日楽しい学校生活を送っています。そんな中でも、未だに一つだけ、常に気にかけていないと安心しない事があります。それは、「まわりの目」です。小学校まではそんなに気にもとめていなかったのに、なぜか中学校に入ってから、まわりの目を気にしてすごく不安になることがあります。まわりの大人は「中学生はそんなもんだ」と言うけど、私はそんな空気が正直苦手だし、「そういう年頃」の一言で片付けてほしくありません。

私は、小学校の時から、何かと目立つ事をやらせてもらってきました。そして、中学校では、今年の三月まで生徒会長をやっていました。生徒会に立候補すると決めるまでにも、かなりの時間がかかりました。「私なんかが立候補すると知ったら、みんなはどう思うだろうか」「応援してくれるだろうか」と、今から思えば、必要以上に悩みました。それから、やっとの思いで立候補を決めて、なんとか選挙にも当選しました。でも、喜んだのも束の間でした。ある子が私に向かって言った言葉は、「何で、おまえみたいなやつが生徒会長ねんて」「調子にのんな」というものでした。その時は、「やっぱり立候補しなければよかった」という、後悔と悲しさでいっぱいでした。そして、生徒会に入ってからも、そういう言葉が度々聞こえてきて、生徒会をやめたい、と思うこともありました。

やっとの思いで「挑戦してみよう」と決めた事を他人に一言で批判されてしまったらどうですか？私は、もう目立つことはやめておこう、と思って当然だと思います。そして、どうして「頑張ろう」と思っている人に、あっさりと冷たい言葉をかける人がいるのか、私には不思議です。

また、普段の学校生活の中でも、みんなが同じように、「まわりの目」を気にしているように見えます。「一人だと地味だと思われるから、嫌いな子とも一緒にいる。」という話をよく聞きます。とてもくだらないことだと思うし、一人でいればいいと思うけど、自分がもしその立場になったら、その子と同じように「まわりの目」を優先してしまうかもしれません。

しかし、少し前に一人の友達に「まわりの目」について話したら、意外な答えが返ってきました。それは「別に、何をしたって、そんなの自分の勝手やん。まわりがどう見てるかなんて関係ないし。」という言葉でした。言われてみれば確かにその通りだけど、その時の私にはとても新鮮な発想でした。その友達の一言で私の心は少し軽くなって、前よりも「まわりの目」を気にするのをやめようと思いました。

それでも、まわりの人の多くは、やっぱり他人の目を重視します。私はあの言葉をきいた日から、「まわりの目」に怯えている人に、同じ言葉をかけています。でも、それだけでは、やっぱり全体がよくはなりません。

だから私は、みんなが「まわりの目」を気にせずにいられるようにするためには、一人一人が意識を変えなければいけないと思います。「みんなが他人に流されず、自分の意志を大切に行動すること」「まわりは、その人が頑張ろうとしている事を絶対に批判したりしないで、素直な気持ちで応援してあげること」。これはそんなに難しい事ではないと思います。決して、「自分勝手に行動していい」とか、「誰かが間違った事をしても注意しなくていい」という意味ではありません。集団生活の中で、それぞれが最大限に、自分の個性を生かしていくためにも必要なことだと思います。きれい事に聞こえるかもしれません。でもこれが、今私が一番伝えたい事なのです。

もう、「まわりの目」を気にして、臆病になるのはやめましょう。これからは『まわりのにあわせる』のではなく、誰の前であっても自分らしく振る舞えるように、意識から変えてみてはいかがですか？

奨励賞

笑顔の花を咲かせよう

七尾市立田鶴浜中学校　３年　山本　楓

「何で？何で足が前に進まないの？」泣きながら話す私に母は「大丈夫、大丈夫だから。」と優しく励ましてくれました。

私は部活で陸上をしています。そのころの私は大会で思うような走りができず、走るたびにタイムが悪くなっていました。

息が苦しくて腕も足も動かなくなり、走ることができず、歩くことも何度かありました。そのたびに普通に走っている仲間がうらやましく感じました。

部活がイヤで朝起きてまた一日が始まると思うとうんざりした気分になりました。

そんなある日、監督に「お前、もしかしたら貧血かもしれんから、一回病院に行ってこい。」と言われました。結果は「貧血。」平均よりも低く、かなり悪い。その日以来、寝る前に二錠ずつ薬を飲むことになりました。

その薬はまずく、ボンドのように変なにおいがするので、飲むにはかなり抵抗がありました。「これを飲んでいればきっと良くなる。走れるようになるんだ！」と信じて飲んでいました。しかし、何日飲んでも結果がでないため薬を飲まなくなったのです。すると、母が、薬が減っていないことに気付き、

「何やっとらん？何で飲まんがん？」

「だっていくら飲んでも変わらないじゃん。」

「でも。これ飲まんとまた皆に追いていかれるよ。それでもいいがん？」

母にしかられ、自分と向き合うことができました。がまんして薬を飲み続けているうちに足が軽くなり、大会でも自己ベストが出るようになったのです。

あのとき、母がしかってくれたから。あのとき、母が励ましてくれたから。あのとき、支えてくれる人が私のそばにいたから。あのとき、沢山の笑顔に救われたから。そう、私は皆に助けられていたことに気付いたのです。

私は何度も笑顔に助けられてきました。だから今度は私が「笑顔になるためのなにかをしたい。」と思って生徒会に入りました。

まず笑顔になってもらうために、昨年度の「友達の木」にひきつづき「心のなる木」を植えました。先生やクラスの友達にありがとうのメッセージを葉っぱに書いて貼りました。掲示したとたん、見た人全てに笑顔の花が咲き、気付くと私も笑顔でした。

次に執行部で『スターチス』という賞を贈ることにしました。『スターチス』とは花言葉で「さりげない思いやり」です。この賞を贈ることでクラスの皆が、周りを笑顔にする人が誰なのか考えるようになりました。

そして、賞をもらった人はもちろんのこと周りの人全てに笑顔の花が咲きました。

さらに、生徒会企画のふれあい集会では地域のお年寄りの方々とグラウンドゴルフを通して交流することができました。プレーする皆の姿は笑顔の花でいっぱいでした。その交流は、この日をきっかけに、登下校のあいさつや会話が地域にどんどん広がり、笑顔の花が咲いたことは、言うまでもありません。

あなたの周りには笑顔はありますか？私は、友達や周りの人に笑顔をもらいました。だから、これからは浜中に、もっともっと沢山の笑顔の花を咲かせていきたいです。

奨励賞

共に生きる社会を目指して

金沢市立港中学校　３年　佐々木　晃

今年の七月、僕は家の前で雨に濡れ震えている子猫を拾いました。恐らくその猫は捨てられたものと思い、見捨てておけず家に入れましたが、誰にもなつこうとせず人間に怯えている様子でした。迷い猫かもしれないと思い、警察に届け出があるか確かめに行ったところ、届け出はなく、警察で預かっても一日たてば保健所に連れて行かれ、保健所では一週間で殺され処分されるそうです。自分の家におこうかと思いましたが、家族には「うちでは飼えない」ということで反対されました。

たかが捨て猫の命と言ってしまえば簡単ですが、実際、子猫を目の前にしていると、自分が警察に連れて行くだけで、この小さな命が、この世から消えてなくなってしまうのだろうと思うと、どうしても手放せない自分がいました。

愛媛県動物愛護センターでのことを記した「犬たちをおくる日」という本の中に、センターで一年間に処分される犬の数は約四千頭。そしてそれらは、保健所で捕獲する野犬ばかりではなく、近年は飼い主が、人をかんだ、世話ができない、飽きた、年老いたから、生まれた子犬がいらない等という、あきれるほど身勝手な理由で保健所につれてくる例が後を絶たないと書かれていました。僕が拾った猫もこの一例でしょう。

もともと犬も猫も野生の生き物で、大自然を自由に走り回っていたものを、犬は一万五千年くらい前に、猫は八千年くらい前に、番犬や猟犬、そして鼠を捕らせるために、人間の都合で人間社会に取り込み、長年飼い慣らして、二度と野生では生きていけないようにしてしまったと聞きます。

動物は、人間に飼われて生きるように形づくられてきましたが、最近はさらに商品としての価値を重視する傾向にあります。ペットショップで売られている動物達は、無理矢理交配させられ子供を産ませられ続けている場合も多く、また近頃ではペットの一日貸し出しをする店もあり、まるで“モノ”扱いです。

三月十一日に起きた東日本大震災では、一瞬のことで連れ出すことができなかったり、避難所では飼えないからとペットや家畜が置き去りにされました。原発二十キロ圏内の動物達は安楽死ということで全頭が殺処分され、家畜小屋の家畜や鎖につながれた犬は逃げられないまま、死の中でも最も苦しいとされる飢えと渇きの果て、おびただしい数が死にました。引き取り手のないペット、そして、町中を走り回る野犬と化した犬の群れ。半年たった今、ようやく動物達への保護が始まりました。

この大震災、そして九月の台風による甚大な被害は、僕達人間が大自然の前では、いかに頼りなく無力な生き物であるかを教えてくれました。人間は大自然ん恵みを受けつつ、驚異にさらされながら、他の生物と寄り添い、他の生き物の命をもらい命長らえているのです。動物達と暮らす以上、人間はその命を輝かせる責任があると思います。

僕が家族の反対を押し切って例の猫を飼い始めて二ヶ月です。家族の中で一番反対していた祖母が、今ではこの猫の最も良き理解者のようで、動物の持つ力の大きさを感じます。この小さな命を預かりこれから大切にしていきたいと思います。僕がこの猫にしてあげられることは少ないかもしれません。だからこそただ自分がかわいがり楽しむためだけではなく、一つの命として、互いに命輝く生き物どうしとして、この猫の一生を見守り続けたいと思います。

さて、今ペットを飼っているあなた、飼いたいと思っているあなた、動物達の命に対する思いは大丈夫ですか。

奨励賞

そうじから学ぶ

白山市立鳥越中学校　３年　中西　太郎

地面に散らばった埃や砂、虫の死骸、窓の汚れ、隅に溜まっている黒い物体、僕は玄関のその汚れを雑巾とほうき、これだけで必死になって掃除をしました。

今年度の初め、新しく代わってこられた先生に、こう言われました。

「掃除を真剣にやれ。ただひたすらきれいにしようと思ってやれ。」と

僕は－そんなの当たり前じゃないか－と思いました。しかし、そんな僕の気持ちをわかったかのように先生は、

「そんな事、当たり前だろうと思った奴。お前が一番分かっていない。」と言われました。

ふと思い返してみると、たしかに僕は先生のおっしゃる通り、今まで掃除を真剣にしてきたとは言えませんでした。掃除は大切だ、なんて思っていても、実際は何もできていないことを痛感し、とても恥ずかしい気持ちになりました。それと同時になぜ掃除の話をしたんだろうと疑問に思う部分もありました。そこで放課後、先生に聞きに行く事にしました。

しかし、先生は

「これを読めばわかる。」

と数冊の本を貸してくれ、後は何も言ってくれませんでした。

僕は家に帰るとすぐにその本を読み始めました。どれも掃除についてとても詳しく書かれており、時間がたつのも忘れ、すべて読んでしまいました。読み終わると、僕はとても感動しました。本にはこう書かれていました。「人はいつも見ているものに心が似てくるため身の回りをきれいにする事は、心を磨く事に繋がる。」つまり、掃除とはただきれいにするのではなく、心もきれいにするのです。そのことを踏まえて、何をどうすればいいのかと僕に訴えかけてくれました。

僕はすぐに母に頼み、雑巾をもらって玄関の掃除を始めました。玄関は「すべてのエネルギーの出入り口」と本に書いてありましたので、まずはここからだと思い、始めました。始めるとすぐにゴミが、山のように出てきました。前々から気にはなっていましたが、ここまで汚れていたのには驚かされました。しかし、一時間もすると見違えるようにきれいになり、それに伴ってこみ上げてくるものがありました。充実感と達成感が入り混じったような何かを僕は得たのです。その日から僕は二つのことを自分に課せました。

一つ目は、毎日十分の家の掃除、二つ目はゴミを見つけたら拾う。簡単そうに見えますが、とても難しいことです。例えば通学中、草むらに空き缶が落ちています。あなたはそれをわざわざ自転車を降りて拾いますか？ほとんどの人は拾わないか、もしくは気にもとめないでしょう。では、もう一つ、あなたはポイ捨てをした事がありますか？誰だって一度くらいはあるでしょう。しかし、今なお、ポイ捨てをしている人がいれば、その人は最初の質問で拾わないと考えた人が多いと思います。それはゴミを拾うという意味をわかっておらず、実際にゴミを拾った事がないからです。僕もそうでした。今までゴミを拾っている人の事など考えた事もなく普通に捨てていました。しかし、拾うようになってわかったんです。拾う人はとても重い気持ちになるということを。

もし、あなたが今もポイ捨てをしているなら、一度ゴミを拾ってみてはいかがですか。ポイ捨てをしていないという人もぜひ。きっと、大変だと思います。しかしやってみるとわかります。次からゴミを拾った所を通ると、きっと心が暖かく、そして少し幸せを感じられるはずです。

社会が、そしてみんなが幸せでいられるように僕は今日も掃除を真剣にしています。あの改めて真剣にした玄関掃除の日からずっと。

奨励賞

惑わされない心

小松市立安宅中学校　３年　谷内　美月

今年の三月十一日に、日本中に衝撃がはしりました。東北沿岸を大津波が襲い、人々や家などすべてを飲み込んでしまった東日本大震災です。そして、地震と津波は、福島の原発にも打撃をあたえました。被曝の問題が、毎日メディアに取り上げられて重要視されています。また、原発のことで世界中が原発支持と反原発で大きな問題となっています。今現在、日本の福島の人々は、つらい事実と直面して苦しんでいます。

「被曝で怖いのは、健康被害ではなくて差別だ。」

と、福島の人がニュースで言っているのを見ました。福島の人が避難先で悲しくなることが少なからずあったのです。

「放射能がうつる。」

と、からかう子供たち。転入届けも仙台の人はいいが、福島の人は放射線を確認するスクリーンテストの証明書を提出しなければいけないなど。福島の人が今、一番に考えなければいけないのは自分自身の安全です。それを求めて、住み慣れた家を出て避難しているのに、こうゆう問題が起こるなんておかしいと思います。また、福島県産の野菜や魚介類、肉などの風評被害も問題になっています。

なぜ、被害を受けた人ばかりが苦しまなければいけないのでしょうか。なぜ、そんなに差別するのでしょうか。

被曝すると恐ろしいことが起こると、報道するメディアが人々を怖がらせていると思います。みんな、ネットやニュースからの情報を信じすぎだと思います。見えない恐怖が人々を混乱させて、今やるべきことがわからなくなっているのです。助け合わなければいけないのに、自分たちを守ろうとして人を傷つけているのです。自分で正しい知識を調べ、考えれば、福島の人々を悲しませることはないはずです。間違っているのに、周りの人に流されてしまってはいけないと思います。私も過去に誤ったことをしました。

それは、人のうわさや見た雰囲気だけでその子をイヤな子と判断して、しゃべろうとしなかったことです。初めて会った子なので、私に不安がありました。笑うこともなく、うつむいて暗い感じがよけいにイヤな子と思い込んでしまいました。しかし、何がきっかけだったかは忘れましたが、二人でしゃべることがありました。その時に、とってもおもしろい子で、楽しくて、イヤな子ではないとわかりました。私は、自分の思い違いをはずかしいと思い、その友達に心の中であやまりました。なぜ、自分から話すことをしなかったのだろうか。うわさや見かけで判断せず、自分からちゃんと友達になろうとしていれば、もっと早く仲良くなっていたと思います。そして今は、自分の意志や本当の気持ちを大切にするために、初めて出会う人とは、積極的に話しかけるようにしています。

東日本大震災によって困っている人は、まだたくさんいます。私は支援として募金をしましたが、それだけで終わってはいけないと思います。中学生の私でもできることはまだたくさんあるはずです。遠くからでも被災した方に対して、温かい気持ちを持つことができます。被曝問題に対しても、正しい知識を学んで偏見をもたない態度でいられます。間違って得た知識を、正しく訂正することができます。大げさなネットなどの情報にも惑わされることはありません。

もし、私の近くに避難してきた人がいたら、偏見などをもたずに積極的に声をかけて、友達になろうと思います。そして、これからも自分から学び、何が一番大切なのかを考え、惑わされない心を持ち続

けたいと強く思います。

奨励賞

心の中の色

白山市立光野中学校　３年　森田　蘭

先日、一つ下のいとこから、こんな話を聞きました。ある日の掃除の時間のことです。たまたま見廻りに来た先生が、不自由な体で一生懸命黒板を消している、ある生徒の姿を見て、

「黒板消しは大変だから、明日からは、ほうきにしなさいね。」

と言いました。しかし次の日、いとこが掃除場に行くと、ほうきは他の人達に使われていました。いとこは、ほうきを持っていた男子達に

「誰か代わってあげて。」

と言いましたが、男子達は、

「そんなん俺ら聞いていない。あいつだけ、ほうきなんてズルイし。」

と言って代わろうとしませんでした。その上周りには昨日の先生の話を聞いていた人もいたはずなのに、誰一人その子のことをかばおうとしなかったのです。結局いとこは、ろう下で見かけた先生にその事を話して注意してもらい、男子達はしぶしぶ代わってあげたそうです。私は、この話を聞いた時、代わってあげようとしなかった男子達よりも、知っていたはずなのに見て見ぬふりをした周りの人達に、とても腹が立ちました。きっと、男子達にいろいろ言われるのが怖かったのでしょう。でも、いとこが一生懸命その子のことをかばっていたのに、知らないふりをして逃げるなんて、なんてズルイんだろう。そう考えて私は、ふと、自分も同じようなズルイ行動をとったことがあると思いだしました。

部活動での出来事です。いつものように練習していると、先輩達が、

「今日の部活キツイし、軽くしよう。」

と言っているのを聞きました。私たちは先輩に言われる通り練習しましたが、その内容は、いつもよりとても軽いものでした。その時、私は「おかしい」と気づきながらも反対して先輩達に嫌われることを恐れ、何も言えませんでした。私の心の中には部活後のいつもの達成感はなく、代わりに罪悪感だけが残っていました。そう思っていたのは私だけではなかったようで、帰り道、皆、口々にこう言いました。

「もっと練習して、いい結果を出したいのに今日みたいな練習じゃ無理や。」

しかし私達には先輩にそれを言う勇気など、ありませんでした。間違ってると分かっていたのに、先輩の顔色を見て、自分の心を偽った私達。そして、男子の標的にされることを恐れ、知らないふりをしたクラスの仲間。私は、まるでカメレオンのようだと思いました。カメレオンが周りの色に同化して自分の身を守るように、相手の心の色に合わせて、自分の身を守るのです。たとえその色が自分の望まない色であったとしても、傷つくことを恐れ、無理矢理自分の色を変えてしまう、弱くてズルイ生き物です。あの日、ただ一人誰の色にも染まらず、自分の色を貫き通したいとこは、正しいことをしたはずなのに、自分の無力さに腹を立て、悔やんでいました。私は、そんな彼女を見て、胸を痛め、そして今までのカメレオンだった弱い自分を反省しました。どうしたらいとこのように正しいことをしている人が悔やまなくて済むような世の中を作ることができるのでしょう。その為には、私達が勇気を出して変わる必要があります。今からでも遅くはありません。相手の立場になって考えられる優しい気持ちと、他人の考えに左右されない強い心を持ちましょう。自分の本当の心の色は自分だけが変えられるのです。染めてみて下さい。カメレオンではない、あなたの中の本当の心の色に…。

奨励賞

家族会議～母の一言から～

七尾市立御祓中学校　２年　奥村　眞子

「まこは賛成してくれる？」

ある日、とつ然言われた母の一言から、私は考えはじめるようになりました。

「お母さんね、ボランティアに参加しようと思うの。」

今回の地震が起きた東北地方に七尾市と交流のある地域があるらしく、被災のせいで家も親も失ってしまった子どもを何年間か七尾市の家庭でひきとってあげる、というボランティアだそうです。その一言に、私は何も言うことができませんでした。母は

「明日の朝、もう一回聞くから、考えといてね。」

とだけ言い、その日、それっきり話はしませんでした。知らない子がとつ然家族になる。私は、ちゃんと接することができるのでしょうか。しかし、その子の立場になってみると、被災のせいで、家も、親も失い、とてもつらい思いをしているうえに、まったく知らない家庭で、とまどうこともたくさんあると思います。どんな子なのか、参加を登録してからではないと分からないので、受け入れるのはとても不安ですが、私がしっかりしなければと思い、母の考えに賛成しました。

そして、次の日、ボランティアについての家族会議が行われたのです。私と母、何も知らない祖母と、妹二人。

「私はこれくらいのことしか、してあげられないと思うの。」

母は自分の考えを話しはじめました。ことのはじまりは、母に届いた一通のメールからです。母の友達から、ボランティアの参加をお願いするメールでした。母は何日も考えて、参加を決意したそうです。私も昨日、自分なりに考えて、母の考えに賛成したことを話しました。祖母は、始めは黙っていましたが、

「おばあちゃんも、何かしてあげたいって、思っとったし、お母さんが言うように、大きな寄付金、あげることもできんし、参加に賛成するわ。」

と言ってくれました。妹二人はどんな子が来るのか楽しみだそうです。私達の家族会議は約一時間にもおよび、賛成となりました。しかし、ただ一人反対した人がいました。それは仕事のため、家族会議に参加していなかった父です。経済的なことなど、いろいろ理由があったのでしょう。母は何回も何回もねばり、同意を求めましたが、父は賛成してくれませんでした。今のところ、ボランティアの参加を断念することになり、母は残念そうですが、父のことを責めませんでした。父なりの考えを母は受け入れたようです。

みなさんはボランティアに参加するかしないかでここまで考えたことはありますか。

ボランティアにかかわらず、何かすることに対して私は今回初めて、深く考えました。家族会議で意見をぶつけ合いました。

みなさんも何かすることに対して、深く考えて、行動してみてください。

例えば、学校などが企画したボランティアに単にのっかるだけではなく、自ら自分には何ができるのかを考え、実行していくことも大事だと思います。

私はこれからも家族会議を通して、ボランティアの参加についての自分の考えを、ぶつけていきます。

講　評

石川県教育委員会事務局学校指導課　担当課長　髙橋　正英

本日、素晴らしい発表をしていただいた１６名の皆さん、ありがとうございました。

皆さんは、それぞれに地区予選を勝ち抜いてきただけあり、中学生らしい視点で、自分の考えを明確に、構成や表現を工夫してわかりやすく話されていました。また、自信にあふれ堂々とした発表態度で説得力があり、大変立派でした。

この大会は、全国大会へとつながる大会であり、結果として、最優秀賞、優秀賞、奨励賞と分けざるを得ませんでしたが、いずれも甲乙つけがたいものであり、その差はわずかであったことを、まず、お伝えしておきます。

本日の発表会で、皆さんは、学校や家庭、あるいは海外での経験や、東日本大震災など社会の出来事から、自分自身のことや人との関わり、社会との関わりなどについて、様々なテーマを取り上げて発表してくれました。

・「あきらめずに頑張り続けること」「自信を持って自分らしさを大切にすること」　など、自分自身を高めていこうとする主張

・「それぞれの違いを認め合い助け合うこと」「コミュニケーションを大切にすること」など、人との関わりの中でよりよく生きていこうとする主張

・「正しい知識で判断すること」「思いを行動に移すこと」など、よりよい社会を実　現していこうとする主張

など、豊かな感性で物事をしっかりととらえ、自分の考えを自分の言葉で述べており、よりよくありたいという皆さんの思いが強く心に響きました。

学校では、

・「よく伝わるように話す力」「人の話を傾聴する態度」を身につけること

・ニュースや社会の出来事に関心を持ち、視野を広げ、将来への目標を持つこと

などを大切にしています。

皆さんは、今日、発表者として、県大会という場でこうした力を生かし、大変立派に発表されました。また、聞き手としても多くのことを感じられたのではないかと思います。この貴重な経験を生かし、それぞれの学校で一層活躍されることを、また、それぞれの夢や希望の実現に向かって着実に歩まれることを期待しています。

本日は、素晴らしい発表を聞く機会をいただき感謝しております。発表された皆さん、そしてこの大会にご尽力頂いた皆さん、どうもありがとうございました。以上で講評といたします。